

HOKU・GEN・KON REPORT



ほく・げん・こん

会報誌

50

2026.4月発行

特集

北陸・福井の湖に刻まれたたしましま — 放射性炭素年代が明かす 7 万年

福井県 里山里海湖研究所・年縞博研究員

朝日 博史 氏

エネルギーコラム

高レベル放射性廃棄物の 最終処分

原子力発電環境整備機構 (NUMO) 地域交流部
地域交流第一グループ GM

幸正 勇人 氏

「S+3E」の再構築



バランスのとれたエネルギーミックスを目指して

北陸・福井の湖に刻まれたしましま — 放射性炭素年代が明かす 7 万年

福井県 里山里海湖研究所・年縞博研究員
朝日 博史 氏

「未来を知りたいければ、過去を学びなさい」という言葉があるように、私たちは過去の年代を正確に知ること、自然や人類史への理解を深めることができます。

歴史時代以前の出来事の時期を調べるには、数値で年代を示す絶対年代と、出来事の前後関係から推定する相対年代という二つの方法があります。そして最終的には、それらの年代を私たちが用いている暦年代(西暦〇年など)に結びつけることが目標になります。

その暦年代の基準を探るうえで大きな役割を果たしてきた場所が、福井県にある水月湖です。湖の底には、明るい層と暗い層が一年ごとに積み重なった年縞(ねんこう)と呼ばれる縞状の堆積物が保存されています(図1.)。これは自然が一年ごとに刻んだ「時間の記録」ともいえるものです。



図 1. 水月湖から掘り出された年縞堆積物 (福井県年縞博物館HPより)

水月湖では、大きな川が流れ込まず、周囲は山に囲まれているため風の影響も小さく、湖底には物質が静かに堆積します。春から秋にはプランクトンを多く含む暗

い層が、晩秋から春には黄砂や鉄分を含む明るい層が形成されます。また湖底は無酸素状態のため、生物による攪乱がほとんど起こりません。さらに、周辺の断層活動によって湖底が時間をかけてゆっくりと沈降してきたことも重要な条件です。このため年縞が堆積する深さが酸素のある浅い層になることがなく、堆積物が乱されずに保存されてきました。こうした条件が重なった結果、水月湖には約7万年分の年縞が途切れることなく残されています。

数万年前程度までの年代を調べる方法として広く用いられているのが、放射性炭素(炭素14)年代測定法です。炭素14は宇宙線の影響によって大気中で生成される放射性元素で、生物は呼吸や光合成を通してそれを体内に取り込みます。生物が生きている間は大気とほぼ同じ割合の炭素14を含んでいますが、死ぬと新しい炭素を取り込まなくなるため、炭素14は時間とともに減少していきます(図2. 図3.)。この減少の程度を測定することで、その生物がいつ頃生きていたのかを推定することができます。

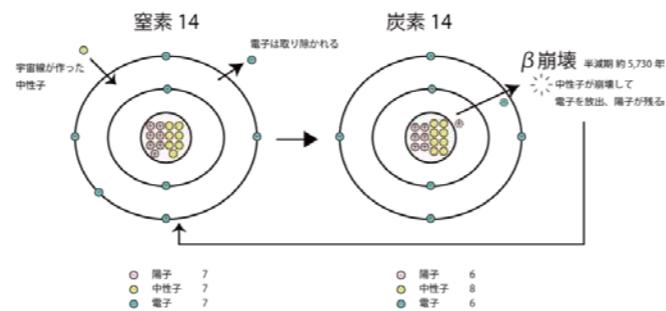


図 2. 窒素14と炭素14の素粒子数及び生成・崩壊の概念図

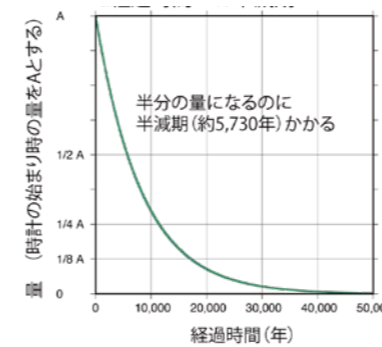


図 3. 炭素14の崩壊を用いた時計の仕組み (崩壊による減少と時間の関係)

ただし、この放射性炭素年代を正確に求めるためにはいくつかの注意が必要です。たとえば化石などに由来する「古い炭素」が試料に混ざると、実際より古い年代が測定されることがあります。また、大気中で生成される炭素14の量は長い時間の中で変動しており、単純な計算だけでは暦年代との間にずれが生じることがあります。

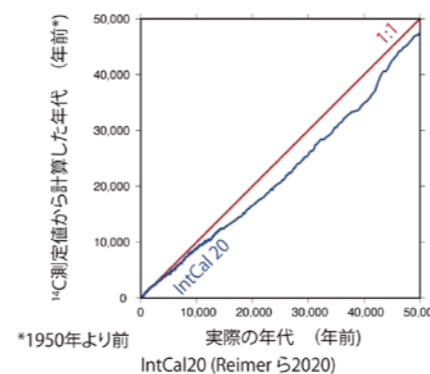


図 4. 放射性年代(縦軸)を暦年代(横軸)に変換する較正曲線「IntCal 20」(Reimerら(2020), Radiocarbon)

このずれを補正するために作られているのが、放射性炭素年代と暦年代の関係を示す較正曲線です(図4.)。樹木の年輪や鍾乳石、サンゴなど、それぞれ独立した年代情報をもつ試料を利用することにより、現在では国際的な較正曲線 IntCal radiocarbon calibration curve が整備されています。

水月湖の年縞は、この較正曲線の作成に大きく貢献してきました。年縞の中には植物片や花粉などが含まれており、それらを放射性炭素年代測定法で測定するこ

とで、年縞による暦年代と放射性炭素年代を直接比較することができるためです。こうした研究によって、放射性炭素年代をより正確に暦年代へ換算することが可能になりました。

福井県年縞博物館(図5.)では、全長約45メートルにわたる約7万年分の年縞を実際に見ることができます。年縞は自然が一年ごとに積み重ねてきた「時間の記録」であり、過去の気候や環境の変化を読み解く重要な手がかりでもあります。水月湖の研究は、放射性炭素年代を暦年代へと結びつける国際的な基準づくりに貢献しています。

このように、福井の湖の底に刻まれた縞模様は、地球の過去を読み解く国際的な「時間のものさし」として重要な役割を担っているのです。



図 5. 福井県年縞博物館全景 (福井県年縞博物館HPより)

<引用文献>
Reimer, Paula J., et al. "The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP)." Radiocarbon 62.4 (2020): 725–757.



朝日 博史 氏

福井県 里山里海湖研究所・年縞博研究員
専門は古気候、環境学
九州大学大学院理学府 博士後期課程修了、博士(理学)
高知大学海洋コア総合研究センター(当時)、東京大学海洋研究所(現 大気海洋研究所)、大韓民国 釜山大学校、大韓民国極地研究所などを経て現職

[企画・広報委員会]

対象:委員

3/12
(木)

第94回 企画・広報委員会

会場: 金沢商工会議所会館 出席者: 16名
 議題: (1)2025年度事業報告および2026年度事業計画(案)について
 (2)北陸電力(株)の現状と今後の取り組みについて
 講話: リニューアルされた福井県立恐竜博物館の魅力と恐竜研究
 講師: 寺田 和雄 氏(福井県立恐竜博物館 副館長(研究))

[技術委員会]

対象:委員

3/11
(水)

第107回技術委員会

会場: ホテル金沢 出席者: 13名
 議題: (1)2025年度事業報告および2026年度事業計画(案)について
 (2)発電所(敦賀発電所、ふげん、もんじゅ、志賀原子力発電所)の近況
 講話: 放射線診療へのAIと仮想技術の応用
 講師: 田中 利恵 氏(金沢大学 医薬保健研究域保健学系 准教授)

[エネルギー講演会]

対象:会員および一般

(1)講演会

第一部

演題: 「放射線診療へのAIと仮想技術の応用」
 講師: 田中 利恵 氏(金沢大学 医薬保健研究域保健学系 准教授)

第二部

11/21
(金)

演題: 「カーボンニュートラルとエネルギーセキュリティに貢献する次世代革新炉」

講師: 近藤 貴夫 氏(日立GEヘルノバニュークリアエナジー(株) 原子力計画部 チーフプロジェクトマネージャー)

会場: 金沢東急ホテル 参加者: 46名
 オンライン配信: 12月5日(金)～[第二部のみ配信]

演題: 「歴史から考える日本のエネルギー問題」

第一部: 講演

講師: 金田 武司 氏(株)ユニバーサルエネルギー研究所 代表取締役社長)

第二部: トークセッション

2/14
(土)

演題: 「重原さんと学ぶ未来のためのエネルギー」

講師: 金田 武司 氏
 進行: 重原 佐千子 氏 (フリーアナウンサー)
 後援: 環境とエネルギーを考えるとやま女性の会
 会場: 富山電気ビルディング 参加者: 91名
 オンライン配信: 3月16日(月)～ [会員限定]



(2)動画解説等

12/16
(火)

演題: 「COP30の結果と評価 - 野心レベルの向上を求める先進国と、資金援助拡大を求める途上国の激突-」

講師: 有馬 純 氏(エネルギー・金属鉱物資源機構(JOGMEC) 特命参与 東京大学公共政策大学院客員教授)



2/26
(木)

演題: 「わが国における核燃料サイクル推進の意義と課題」

講師: 竹下 健二 氏(東京科学大学 理事特別補佐 特任教授/名誉教授 総合資源エネルギー調査会 電力・ガス事業分科会 原子力小委員会 委員長代理)



2/27
(金)

「わっさんのエネルギーそもそも」3動画追加

演題: 「「気候変動問題」ってそもそも?」

講師: 小川 順子 氏((一財)日本エネルギー経済研究所 環境ユニット 気候変動グループ研究主幹)



[セミナー・研修会等]

対象:高専・大学生・次世代層・放射線取扱従事者

(1)放射線セミナー

1/17
(土)

オンライン講義

受講者: 福井工業高等専門学校 物質工学科2年生 39名

演題: 「放射線の基礎に関する講義」

講師: 瓜谷 章氏(名古屋大学大学院 工学研究科 総合エネルギー工学専攻 エネルギーシステム工学 教授)

2/1
(日)

実習

受講者: 福井工業高等専門学校 物質工学科2年生 39名

演題: 「放射線の測定と遮へい効果」

講師: 富田 英生 氏(名古屋大学大学院 工学研究科 総合エネルギー工学専攻 エネルギー安全工学 教授)

(2)エネルギーセミナー

11/4
(火)

受講者: 福井県立大学 経済学部3～4年生 19名

演題: 「エネルギー見通しと原子力の動向」

講師: 下郡 けい 氏((一財)日本エネルギー経済研究所 資源・燃料・エネルギー安全保障ユニット 国際情勢分析第1グループ 主任研究員)

2/3
(火)

受講者: 北陸学院中学校1年生 39名

演題: 「地球の力を知ろう～地熱と原子力から考える日本のエネルギー～」

講師: 窪田 ひろみ 氏((一財)電力中央研究所 サステナブルシステム研究本部 気象・流体科学研究部門 研究推進マネージャー 上席研究員 博士(環境学))

(3)放射線取扱技術研修会

会場: 金沢ニューグランドホテル 受講者: 31名

【講演1】 演題: 「最近の放射線規制の動向(放射性同位元素等規制法関連)」

講師: 喜田 真一郎 氏(原子力規制委員会 原子力規制庁 長官官房放射線防護グループ放射線規制部門 放射線検査官) 深野 重男 氏(原子力規制委員会 原子力規制庁 長官官房放射線防護グループ放射線規制部門 技術参与)

3/16
(月)

【講演2】 演題: 「核医学治療でがんが治るんです」

講師: 絹谷 清剛 氏(金沢大学 副学長) 共催: 北陸地域アイソトープ研究会

(4)その他 学習会等

2/28
(土)

金沢子ども科学財団「アリス館志賀・原子力技術研修センターで学ぼう!」

参加者: 小学校4年生～中学校3年生と保護者 8組15名
 見学先: 北陸電力(株)アリス館志賀、原子力技術研修センター、日本海発電(株)福浦風力発電所

[見学会]

対象: 会員・高専・大学関係

(1) 会員対象

- 11月18日(火) 金沢発 18名(北陸電力(株)志賀原子力発電所)
- 11月26日(水) 富山発 22名(北陸電力(株)志賀原子力発電所)
- 11月28日(金) 敦賀発 10名(日本原子力発電(株)美浜原子力緊急事態支援センター、福井県年縞博物館)
- 3月3日(火) 金沢発 11名(北陸電力(株)志賀原子力発電所)

(2) 高専・大学生対象

- 10月15日(水) 北陸学院中学校2年生 35名
(関西電力(株)美浜原子力発電所、美浜町エネルギー環境教育体験館「きいばす」)
- 11月28日(金) 金沢大学医薬保健研究域保健学系量子医療技術学講座4年生～修士2年生 13名
(北陸電力(株)志賀原子力発電所)
- 2月10日(火) 福井工業大学 原子力技術応用工学科1年生 7名
(日本原子力発電(株)敦賀発電所、大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 核融合科学研究所)

[第48回児童図画コンクール]

対象: 小学校4年～6年

テーマ: 「みんなで えがこう 未来の社会」

応募締切: 9月11日(木)
募集対象: 北陸三県(福井県は敦賀以北)の小学校4～6年生
後援: 富山県教育委員会、石川県教育委員会、福井県教育委員会

[審査結果]	応募校数	応募点数	学校賞	個人賞
富山県	7校	94点	3校	20名
石川県	12校	113点	3校	13名
福井県	21校	141点	4校	20名
計	40校	348点	10校	53名

※「入賞作品集」制作、HPにも掲載



[情報提供]

対象: 会員および一般

広報誌発行

「ほくげんこんエネルギー・コラム これってどうなの?」

ヒロ・ミズカミ代表 水上 裕康氏

[12月 No.09]

「「追憶」の前にやるべきこと～大切な石炭供給網を「思い出」にしないために～」

[3月 No.10]

「「そんな昔のことは忘れた」～エネルギー・環境政策には一貫性を～」

「第一部:放射線診療へのAIと仮想技術の応用(田中 利恵氏)

第二部:カーボンニュートラルとエネルギーセキュリティに貢献する

次世代革新炉(近藤 貴夫氏)」(12月)

「歴史から考える日本のエネルギー問題(金田 武司氏/重原 佐千子氏)」(3月)



寄稿文

講演録

北陸原子力懇談会 アンケート実施結果

北陸原子力懇談会では、より良い情報提供や活動ができるよう、講演会やセミナー、見学会へご参加いただいた方にアンケートをお願いしています。

今回、「エネルギー講演会」「施設見学会」のアンケートでいただいた、多くのご意見の中から一部をご紹介します。

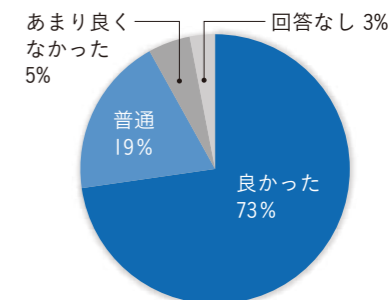
皆さまから寄せられたご意見、ご感想をもとに、より関心や興味を持っていただけるよう、活動を充実してまいります。

[エネルギー講演会]

【自由意見(一部を要約)】

- ・東日本大震災で、ややヒステリックに原発反対をとえましたが、少しずつ冷静になってきています。日本は、化石燃料を他国に頼らなければならず、自前のエネルギーとして原発は必要だと思います。
- ・子どもたちに伝えることを気かけたい。
- ・早期に全ての原発を稼働させ日本の国力UPに努めてもらいたい。
- ・わかりやすい講演。一日も早い原子力発電所の再稼働を祈りたい。参加してよかった。
- ・日本にとって、とても重要で大切なエネルギー政策・問題を歴史で振り返ることが出来る、とても良い機会。このような講演会をもっと広く一般大衆の方へ紹介・案内してほしい。
- ・原子力発電所が再稼働しているところ、していないところを深掘りしてほしい。

講演会はいかがでしたか?



今後取り上げて欲しい講演テーマは?(複数回答・上位5つ)



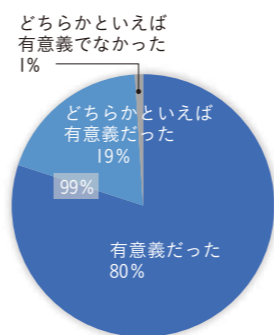
[施設見学会]

【学校関係向け見学会】

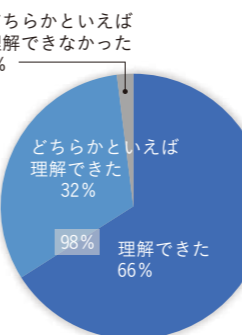
実績: 13校249名さま

見学先: 志賀原子力発電所・福浦風力発電所・志賀太陽光発電所、澁谷工業さまなど

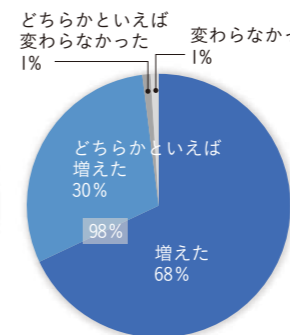
見学会はいかがでしたか?



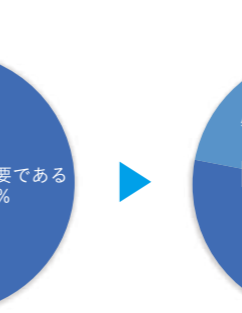
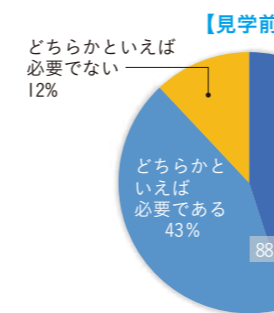
志賀原発の安全対策について?



エネルギー問題についての知識・関心



見学会で「原子力の必要性」の意識が変わりましたか?



【会員さま向け見学会】

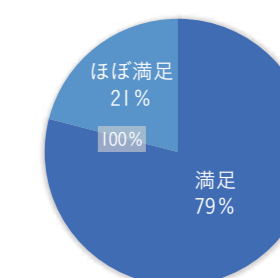
実績: 4回61名さま

見学先: 志賀原子力発電所、美浜原子力緊急事態支援センターなど

【自由意見(一部を要約)】

- ・昨今のエネルギー需要という観点から志賀原子力発電所を早めに再稼働することが重要です。
- ・内部設備に関する詳細な説明を増やしてほしい。
- ・実際に点検作業や、訓練をしているところも見てみたい。

見学会の内容はいかがでしたか?



高レベル放射性廃棄物の最終処分

原子力発電環境整備機構 (NUMO) 地域交流部
地域交流第一グループ GM 幸正 勇人 氏

昨年2月、第7次エネルギー基本計画が閣議決定され、原子力発電については前計画の「依存度低減」から「最大限の活用」へと大きく舵が切られました。

原子力発電を活用するうえで「高レベル放射性廃棄物」の問題は、避けて通れません。「高レベル放射性廃棄物」は人々の生活環境に影響を与えないよう「地層処分(地下深くの安定した岩盤に埋設)」する方針です。処分地はまだ決まっておらず、処分地選定に向けたプロセスをさらに加速させる必要があります。

高レベル放射性廃棄物の最終処分の処分地選定から建設、操業、閉鎖を担う事業主体が原子力発電環境整備機構(通称、NUMO※)です。

※2000年、経済産業大臣の認可を受けて設立された組織

1. 高レベル放射性廃棄物とは？

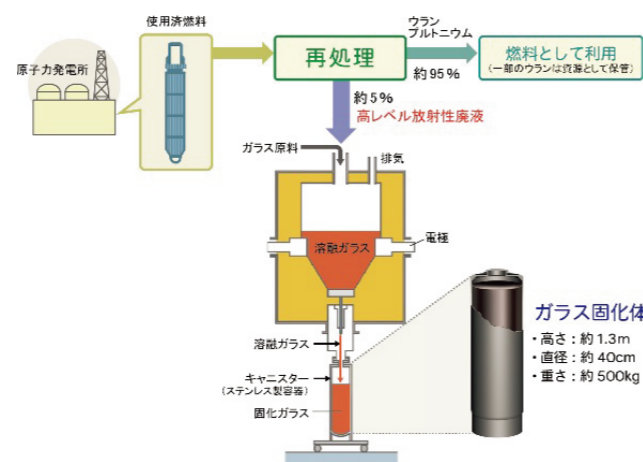
エネルギー資源に乏しい日本では、原子力発電で使い終わった燃料を再処理して、再び燃料として有効活用する方針です。再処理により、使用済燃料の約95%は燃料として再利用できます。残りの約5%が再利用できない放射性的な廃液で、これをガラスと混ぜ合わせて固めた「ガラス固化体」が高レベル放射性廃棄物です。

ガラス固化体に含まれるウランやプルトニウムの量は極めて少ないため、核分裂連鎖反応が起こることはなく、爆発することはありません。製造直後のガラス固化体は、表面温度が約280℃で、高い放射線が出ますが、厚さ約1.5mのコンクリートで遮へいすることにより、

その外では人が放射線を気にすることなく立ち入ることができるレベルまで放射線量が下がります。

日本では、半世紀以上にわたって原子力発電を利用してきました。これまでに発生した使用済燃料の一部は海外で再処理され、ガラス固化体として日本に返還されています。これらは、青森県六ヶ所村の貯蔵管理施設で30年以上安全に保管されています。

現在、国内の原子力発電所の燃料プール等で保管されている使用済燃料をすべて再処理したと仮定すると、約27,000本のガラス固化体が現存することになります。



2. 高レベル放射性廃棄物の処分方法

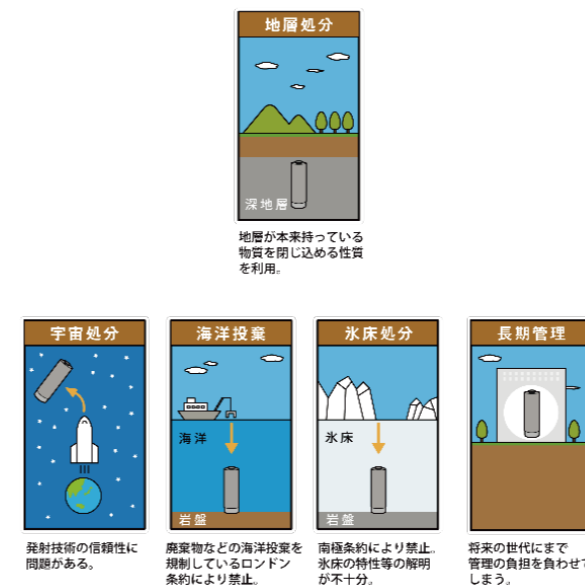
国際条約(使用済燃料管理及び放射性廃棄物管理の安全に関する条約)で、「放射性廃棄物は発生した国において処分されるべき」の考えが示されています。

日本では高レベル放射性廃棄物を、人々の生活環境に影響を与えないよう、地下300mより深い安定した岩盤に埋設する「地層処分」という方法で最終処分する方針です。NUMOでは、ガラス固化体を40,000本以上埋設できる施設を、国内で1ヶ所つくる計画です。

地層処分は、地震・火山・津波などの自然災害や戦争・テロなどの安全上のリスク、コンクリートの劣化による建物管理など将来世代への負担を避けるための最も合理的な方法です。

地層処分以外の方法も検討されましたが、ロケットで宇宙へ飛ばす「宇宙処分」は技術の信頼性に課題があり、海の深いところに捨てる「海洋投棄」や南極の氷の下に埋める「氷床処分」は国際条約で禁止されています。

地層処分は、国際社会から現時点で最も安全で実現可能な処分方法とされています。フィンランドでは、2016年12月から処分場の建設が開始され、2024年8月から処分場の試運転が行われています。



3. 地層処分の安全性

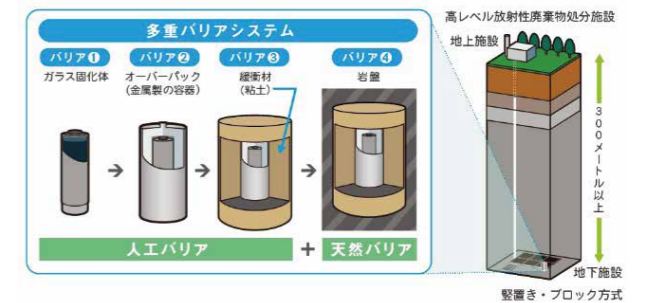
(1) 多重バリアシステム

地下深部は、酸素が少ないため物質が変化しにくく、

地下水の流れが遅いため、モノの動きが非常に遅いという「閉じ込める」機能があります。国内の遺跡から粘土に埋まった1800年前の銅鐸や750年前の鉄の手斧がほとんど原形をとどめて発見された事例があります。また、地下深部は人間が容易に近づくことができず「隔離する」機能があるため、「閉じ込める」機能と合わせて「天然バリア」と呼ばれています。このことから、地下深部は放射性物質を長い期間、人間の生活環境に影響を及ぼさないよう処分することに適しています。

また、埋設する際には、ガラス固化体を厚さ20cmの金属製の容器(オーバーパック)と厚さ70cmの粘土でできた緩衝材で包みます。ガラス固化体と合わせて、これらを「人工バリア」と呼んでおり、ガラス固化体が地下水と触れることを長期間にわたって防止します。

このように、天然バリアと人工バリアを組み合わせ「多重バリアシステム」により、長期間の安全性を確保します。



(2) 処分地に適した地質環境の選定

安全性を確保するため、火山や活断層、岩盤の隆起や浸食などの自然現象を詳しく調査します。例えば、活断層に対しては、物理探査やボーリング調査などで徹底的に調査し、その影響が及ぶ範囲には処分場を作りません。

そのうえで、岩盤の性質や地下水の動きなど地層処分に好ましい地質環境を確認して、放射性物質を閉じ込め、隔離する天然バリアの機能が発揮できる場所を選びます。

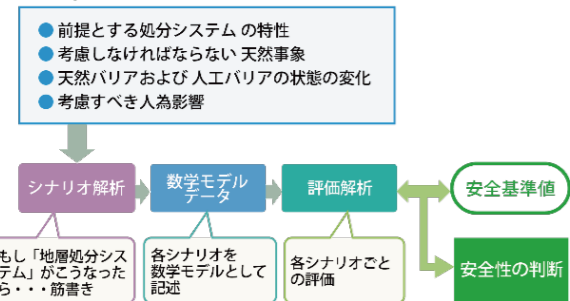
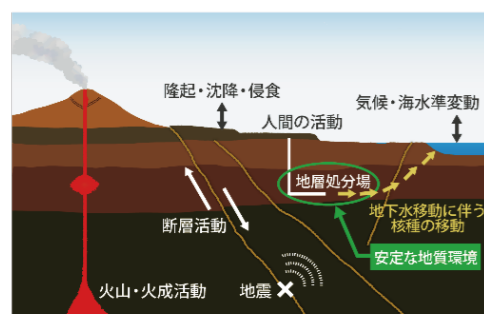
(3) 長期にわたる安全評価

数万年以上にわたる長期の安全性を確認するため、現実には想定しがたい過酷な条件を考慮して、コンピュータ上のシミュレーションを繰り返し行い、安全基準を満たしていることを確認しています。

例えば、放射性物質が地下水中に漏れだすシミュレーションでは、バリア機能により人間の生活環境に到達する量は非常に少なく、また移動中にも放射能は減衰します。更に、処分場を横切る大規模な断層が発生するなど、可能性が極めて小さい事態のシミュレーションも行います。安全評価の結果は、いずれも国際機関が勧告している値を下回っています。

日本で地層処分を進めるための技術的な基盤は、長年の研究により整備されてきています。安全な地層処分を実現するため、NUMOは、国内の放射性廃棄物処分に関する事業者や研究開発機関、海外の実施主体等と協力し、情報交換や共同研究を行っています。今後より実践的な技術開発に取り組み、技術的信頼性の更なる向上を目指していきます。

地層処分システムの安全評価の手順



4. 地層処分地の選定プロセスと現状

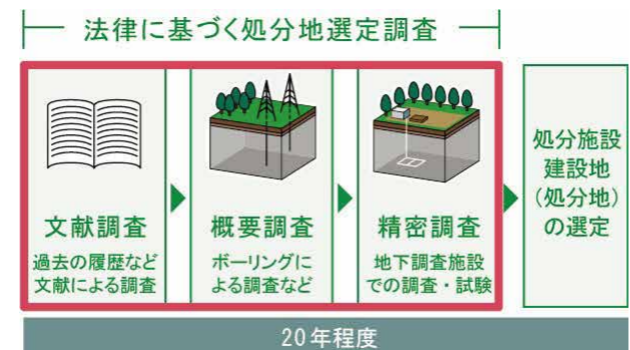
日本では段階的な調査を行い、最終処分地が選定されます。

- ①文献調査(既存の文献から過去の火山活動などを調査、2年程度)
- ②概要調査(ボーリング等により地上から地下の状況を調査、4年程度)
- ③精密調査(地下施設を設置して地下の環境を詳細に調査、14年程度)があります。

この調査期間中(約20年)、放射性廃棄物は持ち込みません。概要調査以降に進む時には、知事と市町村長の意見を聴くことが法律で定められており、その意見に反して次の調査に進むことはありません。

2020年11月に北海道の寿都町と神恵内村、2024年6月に佐賀県玄海町で、議会や住民説明会などでの議論を経た上で「文献調査」が開始されました。

2024年11月、寿都町と神恵内村の文献調査報告書を北海道知事、寿都町長、神恵内村長へ提出し、報告書の縦覧・説明会などを行いました。縦覧や説明会等を通じて、多数のご意見をいただきました。今後、それらご意見に対するNUMOの見解を添えて、北海道知事、寿都町長、神恵内村長へ提出し、国から道知事・町長・村長に「概要調査」へ進むかどうかご意見を伺う予定です。



5. 地域との共生・より深く知っていただくために

処分地の選定から建設、操業、閉鎖までにわたる地層処分手業は、地域の発展と共に、事業を安定的に運営することが重要です。

NUMOは、調査の開始に伴い、地域にコミュニケーションのための拠点を設置し、事業に関する様々なご質問にお答えするとともに、住民の皆さまと共に、地域の発展に向け貢献していきます。

日本は過去半世紀以上にわたって原子力発電を利用してきました。使用済燃料が既に存在している以上、放射性廃棄物の最終処分は、日本社会全体で必ず解決しなければならない重要な課題です。原子力を含む電気を多く使ってきた現世代で、道筋をつけるべく取り組んでいかなければなりません。調査を受け入れていただいた地域だけでなく、全ての国民が考えるべき自分の課題として考えていく必要があります。

地層処分手業について関心を持っていただけましたら、一般の方でも、自治体の方でも、どなたでも国やNUMOから説明いたします。団体さま向けには、青森県六ヶ所村の原子燃料サイクル施設等の施設見学や、大学教授などの専門家による講演会・勉強会等をお手伝いします。以下の二次元コードから、NUMOのホームページへアクセスしてぜひ詳細をご覧ください。

NUMOは全国の皆さまに「地層処分」について知っていただくため、さまざまな取り組みを進めています。

イチから知りたい!
地層処分

専門家派遣・施設見学

10万年にわたる地層処分の安全性



幸正 勇人 氏(こうしょう はやと)
 原子力発電環境整備機構(NUMO)地域交流部
 地域交流第一グループ GM
 略 歴：1983年4月 北陸電力株式会社 入社
 石川支店、東京支社、地域共生本部・課長などに勤務、歴任
 2017年7月 原子力発電環境整備機構(NUMO)に出向
 2020年7月 同 同 へ転籍 現在に至る

2026年度定時総会のご案内

開催日:5月28日(木)

会場: 金沢ニューグランドホテル

【定時総会】14:00～

【記念講演】15:30～16:50

演題: ビジネスで生きる科学的視点～理系バカと文系バカ～

講師: 竹内 薫 氏 (サイエンス作家、ZEN大学教授)

【懇親会】17:00～



ホームページリニューアル

4月1日に、北陸原子力懇談会のホームページをリニューアルしました。TOPページの構成やデザインを刷新し、過去の講演録などこれまで発行してきた情報を素早く探し出し、皆さまのお役に立てるようにしました。

これからも改善を続け、内容の充実も図りながらタイムリーに情報発信をまいりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

お気づきの点がありましたら、お問い合わせページからお聞かせください。

新規会員ご紹介のお願い

北陸原子力懇談会は、北陸の産業経済人が中心となり、1977年に設立されました。主に北陸地域における「原子力開発・利用と放射線利用の促進ならびに原子力産業の発展に寄与すること」を目的とし活動しています。

つきましては、当懇談会の事業活動にご賛同いただける会員企業・団体を募集しています。会員に対しましては、当懇談会の会報誌をお届けするとともに、エネルギーに関する情報のご提供、講演会や見学会などのご案内をお送りいたします。

皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

年会費(1口) : 法人 10,000円 (1口以上) / 団体 5,000円 (1口以上)

(入会お申込みは、下記、当懇談会までご連絡ください。)

北陸原子力懇談会

専務理事 米原 禎

事務局長 島田 英俊

技術部次長(兼)広報部次長

安井 久貴

企画部主任(兼)広報部主任

渡野 祭花

事務局主任 渡辺 まり子

ほくげんこん 北陸原子力懇談会

〒920-0918 金沢市尾山町9-13 金沢商工会議所会館3F

TEL: 076(222)6523 FAX: 076(222)8925



URL: <https://h-genkon.jp>